

平成 29 年度 血液凝固異常症全国調査のまとめ

平成 29 年度の血液凝固異常症全国調査は 1,236 施設(1,414 担当部所)に調査用紙を送付し、平成 29 年 5 月 31 日時点における状況を報告していただくよう依頼した。調査対象期間は平成 28 年 6 月 1 日から平成 29 年 5 月 31 日までの 1 年間である。調査の実施に当たっては、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針(平成 29 年 2 月 28 日一部改正)」を遵守するよう配慮し、調査方法の一部を変更した。

平成29年5月31日現在で集計した日本全国に生存する血液凝固異常症の総数は、下表に示すように8,666例(HIV非感染7,944例、HIV感染722例)となった。このうち、小児の血液凝固異常症の総数は1,364例であった。

日本全国における血液凝固異常症総数

	血友病A	血友病B	VWD	類縁疾患	小計
HIV非感染生存	4781	962	1276	925	7944
男性	4737	944	571	459	6711
女性	44	18	705	466	1233
HIV感染生存	545	167	7	3	722
男性	545	167	2	0	714
女性	0	0	5	3	8
HIV非感染・感染生存合計	5326	1129	1283	928	8666
男性	5282	1111	573	459	7425
女性	44	18	710	469	1241
AIDS発症(生存)	124	42	2	0	168
男性	124	42	0	0	166
女性	0	0	2	0	2
HIV感染死亡(累積)	542	158	1	9	710
男性	540	156	1	7	704
女性	2	2	0	2	6
HIV感染総数(生存および累積死亡)	1087	325	8	12	1432
男性	1085	323	3	7	1418
女性	2	2	5	5	14

調査期間におけるHIV非感染の死亡報告は11例、HIV感染の死亡報告は2例であった。このうち、報告された死因の中にHCVの感染が原因と考えられる重篤な肝疾患が含まれていたものは、HIV非感染で2例、HIV感染で1例であった。

C型肝炎の治療薬として平成 26 年秋より登場した直接作用型の抗ウイルス薬については、インターフェロン/Peg インターフェロンあるいはリバビリンとともに併用する使用報告数が 2 例(HIV 非感染 1 例、HIV 感染 1 例)、インターフェロンを併用しない使用報告数が 117 例(HIV 非感染 69 例、HIV 感染 48 例)であった。

HIV感染症例においては、新たなAIDS発症例は報告がなく、また、死亡時にAIDS指標疾患の罹患があった報告はなかった。さらに、今年度のCD4陽性リンパ球数の平均値は556/ μ L、HIVのRNAコピー数は検出感度未満の割合が82.4%と、HIVに関しては比較的良好な状態が保たれている。

昨年度までの調査に引き続き、治療を要する糖尿病、高血圧、高脂血症、あるいは頭蓋内出血の既往歴に加え、慢性腎臓病(CKD)および骨粗しょう症の状況と、喫煙についても調査した。出血時の年齢に関しては、これまでより詳細な集計を行った。

また、血液凝固異常症のQOLに係るインヒビター、家庭療法、定期補充療法、さらに、凝固因子製剤の使用状況についても引き続き集計を行っている。

血液凝固異常症全国調査は本邦における血液凝固異常症の全体を調査対象とし、その現状および問題点を把握するための唯一の調査であり、今後も調査票の回収率の向上に努めつつ、慎重な調査を継続していきたい。